

女特別捜査官 輪姦陵辱

2004年 HIBINO+ソフト・オン・デマンド  
監督|| 日比野正明  
出演|| Kay



インディーズ系のAVレーベル、ソフト・オン・デマンドに「必殺レイプ」シリーズがあります。

このメーカーは、以前からいわゆる「金蹴りビデオ」を発売していたのですが、従来の、無抵抗の男を女の子が笑いながら蹴りまくるといふ芸のないものが多く、正直言って私の好みではありませんでした。

ある職業的女王様から聞いた話ですが、いわゆるサド役というのはとても神経が疲れるのだそうです。ルイス・ブニエルの映画「昼顔」はフランスの高級娼館を舞台としていますが、マゾの老人が、鞭を持った娼婦に向かって、ひたすら土下座し、叱責を受ける場面があります。娼婦が口汚くののしりながら鞭を打つと、突然老人が「そうじゃない、早すぎる」と怒りだし、娼婦は打って変わって、ごめんなさい、と謝るのです。老人が指示したとおりのシナリオからちよつとも逸れてはいけないわけで、なるほど、神経を使うでしょうね。

何度も繰り返し返すとおり、私はマゾヒスティックな体質があるわけじゃないので、BB好きのマゾ男性を、女性が蹴ってあげて喜ばせている様を見る趣味はない。物理的に女性に負けるはずがないとたかをくくってる男を、急所への一撃で沈めてしまう逆転現象に、激しくフェチズムをかきたてられるのです。

その意味で、日比野正明が監督した「必殺レイプ」シリーズは、私の趣味にぴったりです。これまで、ふつうのOLが仕置き人となってセクハラ上司に復讐する「仕置き女レイプ」、ここで紹介する「女特別捜査官 輪姦陵辱」、スーパーフリー事件を題材にした「女仕置き人陵辱レイプ」の三本が作られています。ヒロインはいずれも正義の味方、急所を責められる男は、犯罪者ども、という設定です。

セクシーなコスチュームに身を包んだヒロインが、悪人の金玉を蹴りまくる、握りまくる。なかでも「仕置き人レイプ」や「女特別捜査官」では、本当に潰してしまうんです。睾丸が潰れる瞬間、手に握ったピンポン玉やゆで卵が握り潰されるクローズアップが挿入されるなど、なかなか工夫もされていますし、主演女優が「潰すよ!」「使えなくしてあげる!」と口走るのも、なかなか嬉しい。

今回は、この三本のうち、もつとも私の好みにあった「女特別捜査官 輪姦陵辱」をご紹介します。

秘密機関に属する特別捜査官ケイに、麻薬を密造する犯罪集団を壊滅すべく指令が下ります。まず、製造工場を突き止めるため、悪の組織が仕切るカジノバーにコンパニオンとして雇われます。黒いレザージャケット、白いブラウス、黒レザーのミニスカートに黒いブーツという出立ちで現れたケイは、いきなりマネージャーに更衣室に連れていかれ、接客用のセクシーな衣装に着替えるように言われます。

お約束どおり、白いブラジャーとパンティだけになったケイを、丸刈りに眼鏡のマネージャーが後ろから抱きつく。ケイは、後ろに手を回し、マネージャーの睾丸をぎゅー！ 悶絶するマネージャーに「女を舐めるもんじゃないわよ」と捨てぜりふ。

さあ、そこから約二十分間は、B B オンパレードです。カジノで誘惑した客をベッドに誘い込み、フェラチオするふりをしてペニスへし折り、睾丸責め。麻薬工場のありかを白状させた後は、容赦なく握り潰し。ついでに、後をつけてきたマネージャーを金蹴りを浴びせ、踵で踏み潰し。さらに工場に潜入した彼女は、見張り役の股間を膝蹴りし、工員たちの睾丸を踏み潰し、火を放って立ち去るのです。この間、去勢した男は実に6人。

その間、口走る台詞が凄い。

「早く言わないと、金玉潰れちゃうからね」

「威勢のいいわりには、金蹴り一発でダウンか」

「さ、金玉潰してやるうか」

「どう、痛かった？ ごめんね」

「どう、金玉、痛いでしょ」

「金玉、握り潰すよ」

「とどめよ！」

悶絶して哀願する男たちには情け容赦なく、

「そうはいかないのよ。さよなら」

「そんなこと、通用するとも思ってるのと、ぐしゃ！」

主演のKayという女優さんは、元JJの専属モデルとか。長谷川京子と井上晴美を足して二で割ったような風貌で、大藪春彦の女豹シリーズの無慈悲なヒロインを思わせる、公権力を後ろ盾にサディスティックな快楽を満たしていくクールなキャラクターがびつたりです。そういう女性、金玉、とか、潰す、とか連呼するのですからたまりません。

もつとも、こういう場面は最初の二十分だけで、後は、卑劣な悪人どもに捕まったケイが、大勢の男どもにかわるがわるレイプされるシーンが延々と続きます。従来からよくある、女格闘家や女刑事といった男性に立ち向かう女性ををひたすらレイプするビデオの一種ですが、日比野監督の作品の場合、ヒロインが睾丸という男性の象徴を破壊する場面をこれでもか、これでもかと冒頭に持っていく、そういう男性にとっては脅威である女性を、逆に押さえつけてペニスをくわえさせ、犯す、という二重の逆転が仕掛けられているのが、よりいっそう興奮をもたらしていると私には思えます。

日比野監督は、あるウェブ上のインタビューでこう発言しています。

「時代とともに男より女が変わってきたんでしょう。戦後教育のもとに、男は女の性の部分に

関して都合がよいように、コントロールできるように、いろいろ押さえつけてきた。でも女が好きなことをするようになって、女は弱いんだぞ、っていう概念は通用しなくなってきた。それで男も変わってきた。男は威張っているようでも結局女に握られちゃうと弱いから」(週刊デジタルデマンド／「ソフト・オン・デマンド」公式HP)

まったくそのとおり。  
急所を握られてしまったら、男はどうすることもできません。